
婚約者は鴉天狗

アマノガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚約者は鴉天狗

【Nコード】

N1419Y

【作者名】

アマノガサ

【あらすじ】

この春に高校生になった少女 烏丸真希は、ごく普通の高校生生活を満喫していた。

しかし、季節が梅雨へと移りはじめた頃、雨の町中で奇妙な格好をした人物と出会う。さらにその顔にはこれまたおかしな黒いお面が。

誰が見ても関わり合いになりたくないその人物。けれど、その出会いは真希の人生を大きく変えていく事になる。

序章（前書き）

過去に某所に投稿歴のあるものの改稿版です。
ジャンルとしてはラブコメになります。
よろしければおつき合い下さい。

序章

序章

「接触の対象は、その娘さんだ」

重く響く声を出しながら一枚の写真を放り投げたのは、見上げるような巨体にもっさりとしたヒゲ面の男。歳は四十過ぎといったところか。おそらく特注であろうスーツに身を包み、じつとある一点を見つめている。

その先には、放り投げられた写真を受け取ったもう一人の人物がいる。不思議な白装束に身を包み、鳥のような人間のような、不気味とも言える黒いお面を付けた性別も年齢不明の者。スーツの男よりは低い身長だが、それでも百八十に届きそうな長身である。

暗雲垂れ込める空模様。すでにいつ泣き出しても不思議ではない天気の中、二人のやり取りは続いて行く。

傍から見れば、思わず目を向ける程度には目立つ二人組みだが、今の彼らに気がつく者は稀だろう。

何故なら彼らは今、樹高三〇メートルはくだらない、巨木の枝の上という常識外れな場所に居るのだから。

「……む？」

写真を見て、お面の人物がわずかに驚いたような声を発する。声からして、こちらも男のようだった。

手に持つ写真に写るのは、どこかの高校の制服を着た、活発そうな一人の少女。つり気味な目にショートの髪がよく似合っていた。

「どうかしたのか？」

その様子を不審に思ったスーツの巨漢が問うが、

「いや、気の強そうな相手じゃ思ってたな」

お面の男は小さく頭を振り、写真を投げ返した。

「先方のご両親にはすでに話を通してある。問題が無いのなら、まずは一度会って来い。どう転ぶかは分からんが、いずれにしても我らにとっては新たな一歩だ」

「……分かっておる」

お面の男はくるりと背を向け、遠くを見る。高い位置から見えるのは、彼方に広がるどこかの町並み。

不意に、お面の男の身体が前方に傾き、そのまま枝の上から落下する。

しかし、スーツの巨漢は驚きも慌てもしない。そうしている間に、お面の男は数秒も無い落下の後、激しく地面に叩きつけられはしなかった。

二人が乗っていた巨木の近辺に、何かが落ちたような形跡はない。また、どこかに運よく引つかかった様子もない。お面の男は、木から落ちると同時に完全に消え失せていた。

不意に、少し遠くからカラスの鳴き声が聞こえてきた。

スーツの巨漢はその声に反応し、今までお面の男が見つめていた先を眺める。その先の空に、一羽のカラスが飛んでいるのが見えた。彼はそれを確認すると、小さく笑みをこぼし、次の瞬間、音もな

くスーッと消えて行った。

まるで最初から何もいなかったかのように、いつの間にかその姿は、巨木の枝の上から完全に消え去ってしまっていた。

風が吹き抜け、木々が葉を擦り合わせるざわめきだけが、残される。

第一章 その1

第一章

土砂降りの雨が降っていた。家の屋根やアスファルトの路面を叩くその音は、さながら轟音のようである。そんな雨の中を、傘を持たぬ一人の女子高生が駆けて行く。

ショートに切り揃えられた黒髪。整った顔立ちながら、そのつり気味の黒い目が、どこか気高い雰囲気を出していた。

学生カバンを頭上に掲げ、なるべく顔に雨が当たらないようにしてはいるが、無駄な努力でしかない。

「あつちやー。こんなことなら寄り道しないでとっとと帰っておけばよかったか」

ひた走る少女、烏丸真希からすままきは、降水確率二〇パーセントを過信した今朝方の自分を軽く呪った。

とつくにずぶ濡れになっている制服やスカートは、重みを増すとともに身体に張り付き、その健康的な身体のラインをうかがわせてしまっている。

平均よりも幾分高い身長で、猫科の動物を連想させる均整の取れたスレンダーな肉体は、走る姿と相まって、一つの芸術の様でもあった。

とにかく帰ったらシャワー浴びない 　ん？

真希は進行方向上、赤色の傘を指す人物の背中を捉え、わずかに

眉をひそめた。何故なら、濃い灰色の世界でよく目立つその傘は、正月芸や時代劇でよく使われるような蛇の目傘だったからだ。

一般的に常用される類の傘ではない。よほど物好きか何かでなければ、そもそも持つてすらいらないはずの代物だ。

そんな珍しい傘を差した人物が、行く先に居る。

怪しい。

真希の脳裏をそんな評価が掠めたが、このまま走り続ければすぐにでも追い越せる状況である。最悪、話しかけられても聞こえない振りをして逃げればいい。

そう結論を出し、真希は速度を緩めずに雨の中を走り続けた。ところが、ここで彼女にとって予想外の事態が起きる。

「む？」

真希が対応を決定した瞬間、計ったかのように傘の人物が振り返ってきたのだ。その顔を見て、真希は雨に濡れた道路の上で急ブレーキをかけざるをえなかった。

振り返った人物と、急制動をかけて止まった真希は、二メートルほどの距離を開けて対峙する。

「うわっちゃー……」

真希は思わず止まってしまった自分を引っ叩きたい気分になった。止まるべきではなかった。走り抜けなければならなかったのだ。

振り返った人物は、真希より頭一つ分ほど背が高い、おそらくは百八十を超える長身だった。不可思議な白装束に身を包んでおり、なんと足元にはわらじを履いている。

この時点で相当に怪しいことは間違いないが、それをさらに増幅させているのが、その顔に付けられた真っ黒なお面だった。鳥のような人間のような、そんな印象を持つお面である。

「お主、もしかや烏丸真希という名か？」

いきなりの言葉に、真希の心臓が跳ね上がった。会ったことも無いどころか、一度見たら忘れられないだろう不審人物、声からして男に顔と名前を知られている。

真っ先に彼女が疑ったのはストーカーだが、

さすがにこんなのはいないわね。

すぐにその可能性は捨て去った。捨て去ると同時に、真希はさりげなく重心を移動させておく。隙あらば逃げ出せるように。幼い頃祖父に習った武道の基礎は、飛び出しの速度を飛躍的に高めてくれるはずだ。

「む？ 人違いじゃったか？」

雨に視界を遮られる上、真希が濡れ鼠状態なこともあって、お面の男は彼女を正確に認識出来ないようだ。

おそらく、もっとよく確認しようという意図で、ゆっくりと真希の方へ近付いてくる。

一歩、二歩、三步目で、真希はアスファルトを蹴って飛び出した。一瞬でお面の男の隣をすり抜け、全力で走り出す。

「なっ、ちよ待」

後方からそんな声が聞こえて来たが、そんなものには構わない。

ここで逃げなければ絶対に厄介なことになると、真希の本能が告げていた。

しばらくがむしゃらに走り、そろそろ我が家が近くなった所で、真希は一度背後を確認しておくことにした。振り返った先には雨に打たれる街並みがあるだけで、あの怪しい人物の影は無い。

「よし、撒いた」

小さくガッツポーズ。心の中で祖父に感謝を告げる。

一息ついてから彼女は再び走り出し、すぐに自分の家に到着。勢いよく我が家の玄関のドアを開けた。

「ただいまー。お母さん、タオルちょうだい。あとすぐシャワー浴びるから」

ずぶ濡れのまま上がるわけにはいかないため、真希は玄関先で母親を呼ぶ。

「あらあら、真希ちゃん傘はどうしたの？」

真希の呼びかけに応じ、一人の女性がタオルと桶を持って玄関へやってきた。

高校生の娘を持つにしては、見た目が驚くほど若い。現在四十を越えたところだが、最低でも三十代前半、ともすれば二十代後半と言っても通じてしまいそうな容姿をしている。

だが、その雰囲気は熟練した母のものだ。その名を、からすまみはる烏丸美春という。

「二〇パーセントだから持ってかなかったの。お風呂場空いてる？」

「まあまあ、二〇パーセントでも折りたたみくらいは持つて行くようにしなさいな。空いてるから、雨を落としてきなさい」

諭すように顔を近づける美春。真希とは違い、背中まで長く伸ばしたストレートの黒髪がわずかに揺れた。

背格好は真希と同じか少し低い程度。しかし、身体の発達具合は母娘でかなりの差があった。主に胸囲という形で。

「そうする。けど、今日の雨じゃ折りたたみなんかあってもなくても同じだと思うけどな」

「それもそうね。今日はこんなに豪雨になるって言ってなかったのだけれど」

美春は左手を頬に当て、右手で左肘を押さえつつ軽く首をかしげる、いわゆるおばさんポーズで家の中に届く雨音に耳を済ませている。

「天気予報なんてアテにならないよ。そのことが身に染みて分かったわ」

乱雑に雨を拭ったタオルを美春に渡し、ずぶ濡れの制服を桶に放り込むと、真希は下着姿で風呂場へ向かった。

脱衣場でその下着も外して洗濯機に放り込むと、風呂場に飛び込んで熱いシャワーを浴びる。

雨で冷えた身体にお湯の熱が伝わるのが心地いい。先にあった不可解な出来事の記憶も、雨と一緒に流れてしまえと思う。

ピンポン……

呼び鈴の音が聞こえて来る。こんな大雨の日に、訪問者とは珍し

い。宅配便の予定はないので、おそらくセールスマンの類だろうと真希は当たりを付けた。

美春はセールスマンのあしらい方が上手い。頂く物を頂いたら、さっさと追い返すはずだ。

そんな事を考えながらシャワーを終え、真希はバスタオル一枚を身体に巻いて台所へ向かった。

熱いシャワーの後は冷たい飲み物と相場は決まっている。ちょっぴり鼻歌交じりに彼女が台所へ入ると、

「おう。邪魔しとるぞ」

台所と一緒にになっている居間の椅子に、まさかの人物が座っていた。

不可思議な白装束に黒いお面をつけた、ついさっき撒いたはずのあの不審人物が、堂々とそこに存在している。

「どうした？ 儂の顔に何か付いておるか？」

言葉を失って口をパクパクさせている真希の方を向いて、お面の男は首をひねった。お面のせいで全く表情が見えないが、真希は何となく片眉を跳ね上げている顔を想像する。

「あ、あんた、何でここに……」

顔を引きつらせながら、やっとの思いで言葉を絞り出した真希の反応を見て、

「儂の目的地は、元々この家じゃったからな」

お面の男は少し笑ったような声を出した。

つまり、この不審人物は元々真希の家に行く途中で、たまたま外で彼女に会ったが逃げられたので予定通りここへ来て、今当たり前のようにそこに座っているということになる。

そう理解した真希は、フツと怪しく笑って、

「お母さん！ 変なのが家が上がってるから警察呼んで！」

「な、ちょ、待てえ！」

真希の大声に慌てたのはお面の男だ。椅子から立ち上がり、素早い動作で真希に近付いてきた。

「きゃっ」

長身の身体に一瞬で詰め寄せられた真希は、驚きのあまり反射的に手を振り上げる。しかし、その手はひょいとお面の男に掴まれてしまった。続けて反対の手も振り上げるが、やはり相手に掴まれてしまっ。

結果、彼女はちょうど万歳をしているような格好で身動きを封じられてしまった。

「落ち着かんかい。何もせん」

「十分してるじゃない！ 放しなさいよこのヘンタイ！」

掴まれた手を振りほどこうとして、真希が身体をよじる。しかし、がっちりと掴まれた手はびくともしない。

「おぬ、誰が変態じゃ！」

「あんたしかいないでしょうが！ 変な格好で変なお面かぶって、それで何処がヘンタイじゃないってのよ！？」

「これは鴉天狗の正装じゃ！ お面は……わけあって外すことは出来ん」

なぜか最後の言葉は若干弱々しくなった。しかし、今の真希にはそんな微妙な変化は分からない。

「何でもいいからとっとと放しなさいよこのヘンタイ！」

「この、また儂を変態などと……。ちつとはこっちの話の話を聞け言うてるじゃろっが！」

こういった手合いの言い合いは、双方がヒートアップしてしまふときっかけがなければ収まらない。売り言葉に買い言葉と言ったものである。目的や論点がずれ、最終的には互いを非難する言葉が飛び交うだけだ。

だが、幸いにも今回はそこまで発展すること無く収まることになる。何故なら、真希はバスタオル一枚巻いただけの格好で、両手を掴まれて万歳状態。そんな状況で激しく動き回ろうものなら

「あ……」

「おっ？」

するりと、何かが肌を滑る感覚がして、真希は我に返った。ゆっくりと、下を向く。身体に巻いていたバスタオルが足元に落ちていた。つまりは

「むっ……」

お面の男が、一糸纏わぬ姿の真希を見て、主に胸を見て低くうなづいた。両手を掴まれていてとっさに隠すことも出来なかった真希の

顔が、見る見る真っ赤に染まっていく。

「むっ、じゃないわよこのドヘンタイがっ!!!」

「うっっ!!」

やや屈んだ姿勢になっていたお面の男の顎に、真希の膝蹴りが炸裂した。その衝撃で、掴まれていた両手が解放される。

すぐさまバスタオルを拾い上げて巻き直し、彼女はキッと相手を睨み付けた。

まともに顎を蹴り抜かれたお面の男は、顎を押さえながら床をころころ転がって悶絶していた。真希はそれを冷ややかに見つめ、止めどばかりにがら空きのゴールデンボールをサッカーキックした。

「ぬおあっ!!」

効果は抜群だった。顎の痛みを忘れたかのように、全身を震わせながら急所を押さええて縮こまっている。いい気味だった。

「あらあら、真希ちゃんどうしたの?」

今頃になってようやく美春が現れる。そして真希を見て、床にのた打ち回るお面の男を見て、やや頬を染めた。

「やだ、まだお昼よ? そういうことはもっと日が落ちてから……」

美春が激しく何かを勘違いしていることは十分理解出来た。だが、そんな事よりも真希にとって不思議なのは、彼女が床に転がる不審者を見ても驚いていないという事だった。

「お母さん。この野郎を見て何とも思わないの？」

「まあ。野郎だなんて失礼よ。大事なお客様なんだから」

「……お客？」

真希が怪訝な顔をする。昨今の客は、変な格好で上がりこんだ拳
句、他人の裸体を見るのが一般的なのだろうか。

「コホン。ちょうどいいわ。小太郎こたろうさんのことことで話しがあるから、
早く着替えてらっしゃい」

小さく咳払いを挟み、美春は真希に言い付ける。真希としても着
替えないわけには行かないので、未だにプルプル震えているお面の
変質者をちらりと見て、溜息を吐きながら二階の自分の部屋に向か
った。

ろくでもないことが起きそうだと、確信めいたものを感じながら。

第一章 その2

「　　ということ、こちらの小太郎さんが、真希ちゃんの婚約者候補ってことになるのかしら」

「ちよつと待つてまったく話が見えないんだけど!？」

真希が着替えて居間に戻ると、お面の変質者　小太郎は何事も無かったかのように元の椅子に座り、その対面には美春が、これもまた普段通りにニコニコしながら座つて待つていた。促されるままに美春の隣に座り、そして放たれた第一声がある。

「あら?　もう話が済んでるから、あんなことしてたんじゃないの?」

さっきの光景のどこにそんな要素があつたのかは知らないが、美晴はまたもほんのり頬を染めている。

「お母さんが何を勘違いしてるのか知らないけど、さっきのは事故よ。そしてこいつはヘンタイよ!」

正面に座る小太郎に指を突き付け、美春に力論する真希。その様子をどう思つたのか、小太郎は一つ溜息を吐き出した。

「あー、もうええわ。訂正するのめんどいし。まあ、今日は顔見に来ただけじゃけえ、さっさとお暇させてもらおうかのう」

すくつと椅子から立ち上がり、美春に一礼する小太郎。真希は特に何の反論もなかつた事に拍子抜けしながらも、相手が帰ると言うのでそれ以上は何も言わなかつた。

居間を出て行く小太郎に続いて、美春も見送りのために出て行く。真希はそのまま残り、玄関先での会話に耳を澄ませた。

「母上殿、騒がしくして悪かったのう」

「いいえ、お気になさらず。あの子には後で説明しておきますから、また後日改めていらしてくださいな。そうそう、お父様によろしくお伝えくださいね」

「おう。伝えときます。ほんじゃ、これで」

玄関のドアが開く音と、少しだけ大きくなる雨の音。次いで、何かが空気を打つ音が聞こえて、ドアの閉まる音が続いた。

何事もなかったかのように居間に戻ってきた美春を見つめ、真希は疑問を口にする。

「で、お母さん。なんかずいぶんと親しげだったけど、こういう事？」

美春は真希の隣には座らず、対面の、先ほどまで小太郎の座っていた椅子に腰掛けた。そして、いつものんびりした口調で、

「そうねえ。簡単に言ってしまうえば、うち、あ、烏丸の家ね。鴉天狗の血が混じった家系なのよ」

そんな事をのたまった。

「……………はい？」

一瞬、ふーん、と流しかけて、その余りの不自然な言葉に頭が緊急停止を促した。そんな真希の驚きを気に留めず、美春はどんどん話しを進める。

「それでね、最近開発とかで天狗さんたち妖怪の住む場所がなくなってきたから、これはもう人間に混じって暮らすしかないってことになったらしくて、方々の妖怪の血が入った家を足がかりにして、共存の道を模索しているんですって」

「いやあの、え？ 話がまるで見えないんだけど。烏丸の家に妖怪の血？」

真希の頭はかつてないほどに混乱していた。余りにも淡々と、普段通りに美春が語るのも、心の準備というか、身構える体勢が作れなかったのだ。

「そうよ。えっと、たしか明治時代の初期だったかしら？ 私たちのご先祖様と鴉天狗の間に子どもが生まれて、その生まれた子どもの血を私もあなたも受け継いでいるというわけ」

「ちょ、ちょっとお母さん。さっきから妖怪妖怪言ってるけど、妖怪なんて実際にいるはずないじゃん」

わずかに混乱から立ち直った真希は、話の肝にして最も気になっている事を口にした。

この科学社会において、妖怪という非現実的なものが実在するはずがない。その考えに基づく発言だったが、これに対する美春の回答は、真希をさらなる驚愕に叩き込んだ。

「あら、いるわよ。だって、会ったことあるもの」

「はあっ!?!」

「またも飛び出す爆弾発言。事ここに至って、真希はある可能性を導き出した。」

昨今、怪しい宗教団体が世間を騒がせる事件がいくつもあったが、美春のこのおかしな言動も、それらに何か関係しているのではないかという可能性だ。

セールスマン相手に無敗であっても、宗教関係は怖いし分からない。仮にそうであれば、下手に否定してもしょうがない。ここは話を合わせて、さらに聞き出すのが上策だった。

「ね、ねえ、それっていつ、どこで？」

表面的には何とか平静を装って、先を促す。しかしながら、真希のこの努力は何の意味も持たなかった。

「別の方なら、あなたも会ったことあるわよ？ 正体を明かしてもらってはいないでしょうけど」

「なぬうつ！？」

美春が止めの一言を放つ。驚いたどころではない。勢い余って真希はテーブルに両手を叩きつけてしまい、その痛さに涙目になる。

「私の妹の彩夏^{あやか}、去年の冬に結婚したでしょう？」

覚えている。真希の叔母であるその人は、美春とは十以上歳の離れた姉妹だが、何度か会ったことがある。

結婚は出来ちゃった婚らしいが、式にも招待された。綺麗な衣装に身を包んだ叔母は眩しいくらい輝いて見え、憧れを抱いたほどだ。その時の光景を思い出し、痛みから逃避する意味でも若干上を見ながらついウツトリとする真希を、美春の言葉が現実に取り戻した。

「そのお相手が、さっきいらした小太郎さんの従兄弟よ」

時が、止まった。ギギギと錆びた駆動音が聞こえてきそうな動作で、真希は美春の目を見る。冗談を言っているような目ではなかった。

「う、嘘おおおっ!」

「嘘じゃないわよ。ちょっと待ってなさい。確か証拠になる物があったはずだから」

先ほどから驚愕に打ちのめされっぱなしの真希を残して、美春は席を立つてどこかへ向かった。五分ほどして、一枚のはがきを手に戻って来る。

「ほらこれ。出産報告のはがき」

差し出されたはがきをひったくるようにして受け取り、印刷された写真を見る。まだ若い夫婦が晴れやかな笑顔で映っている。叔母の腕には白い毛布に包まれた赤ん坊。そして

「なに……これ。ありえない……」

隣に立つ叔母の夫を見て、真希は開いた口が塞がらなくなった。彼の顔や服装におかしなところはない。式で見た時も思ったが、ちよつといいなと思えるかつこいい人だった。

だが、その写真には式で見た時には無かった物が付加されていた。彼の背後から見えている鳥の翼だ。カラスのような漆黒の翼が、隣に立つ叔母をも包み込む様にして広がっていた。

「う、合成じゃない?」

わずかな望みをかけての言葉。しかし、

「わざわざそんなことをする人はいないわよ」

正論で切って捨てられる。それでも、真希は信じていることが出来ない。

「いやだつて……」

「もう。いい加減認めなさい」

「うぐ……」

様々な事実と心の叫びがぐるぐると混ざり合って、真希の頭の中がどんどん混沌としていく。

「あ、そうそう。今日話した事は誰にも言っちゃ駄目よ。他の人に知られたら害はあつても得はないから。はがき？ これは普通郵便じゃなくて直接頂いたから大丈夫なの。それと、お父さんはもちろん知ってるわよ。だって、小太郎さんのお父様とは飲み友達なくらいだから」

そんな美春の言葉が決め手になったのかは分からない。だが、真希の脳は自身の守るため、一つの指令を出した。

「うーん……」

「わっ！ 真希ちゃん!？」

処理能力がオーバーヒートした真希の脳は、とりあえず意識を手放すことで、その場をやり過ごすことを決定していた。

第一章 その3

その日もまた、教室の窓際最後尾から見える空は、どんよりとした雲に覆われていた。直射日光による熱は無いものの、高い湿度によるじめじめとした蒸し暑さは、梅雨時のこの季節、誰もが顔をしかめたくなる。

幸い、真希の通うてんみょうじゅん天命神高校は私立であり、空調設備が整っているため、教室内は涼しく爽やかな状態に保たれていた。廊下に出ると途端に不快さを感じるのが難点だが、終始その状態にあるよりはずっといい。

「中間明けだが、来月にはすぐに期末があるからな。みんな気を抜かないように」

教壇に立つ教師の言葉に、教室がざわめき出す。

そんな喧騒をよそに、真希は行儀悪く片肘を付いて窓の外を眺め続けていた。

そうこうしているうちに授業終了の予冷が鳴り響き、教師は室外へ、生徒はそれぞれの属するグループに固まって、わずかな休み時間間の談笑を行う。

「真希ー」

名前を呼ばれて、真希は声のする方へ顔を向けた。ととととと近寄ってくるのは、ふわふわした長い金髪に、これもまた金色の瞳を持つ小柄な少女だ。母性、あるいは父性本能をくすぐるような愛らしい顔立ちをしており、衝動的に抱き締めたくなる気持ちを起こさせる。

「何か用？」

「うん？ 別に何も無いよー。……理由がないと駄目かな？」

ちよこんと首をかしげる姿は、愛玩動物の破壊力を有する。真希は動き出そうとする身体をぐっと押さえ、

「いや、駄目じゃないけど」

「そう？ よかった」

無邪気に笑う少女を見て、真希は内心溜息をついた。

彼女の名前は、てんみよつじんとわこ天命神十和子。真希の通う学校と同じ名称なのは、彼女が理事長の娘だからである。

れっきとした日本人のだが、どうも先祖のどこかに日本人ではない血が入っているそうで、隔世遺伝によりこんな奇跡が起きたらしい。

「それはそうと真希。何かあった？ 今日はずいぶん変だよー？」

「あー……。まあ、ね」

真希の頭の中で昨日の出来事が再生される。

お面の変質者と美春の告白。

卒倒して意識を取り戻した後、さらに詳しい話を聞かせられそうになったが、また卒倒してはたまらないので全力で逃げた。

そんなことをしても、現実がひっくり返りはしないのだが。

「なにになに？ もしかして好きな人でも出来たのー？」

瞳をキラキラさせながら、十和子はペンと手帳を取り出した。彼女は情報収集を趣味としており、ありとあらゆる情報を、ありとあらゆる方法で集めている。あまり声高に言えないが、若干非合法なものも含まれるらしい。裏でその筋の人間と情報の売買を行っているという噂もあるが、さすがにこれは眉唾だろう。

「少なくとも、そういうんじゃないよ」

真希が苦笑しながら、しかし本心を告げる。そんな彼女に、十和子は特に追求もせず、しかしぶくーっと頬を膨らませ、ペンと手帳をしまう。

「つままないなー。真希は他の人と違って最初から全部のカード見せるんだもん。駆け引きのしようがないよ」

「十和子相手に駆け引きしたって、十中八九あたしが負けるじゃない。やる意味がないでしょ？」

「確かに負けるつもりはないけどさ。あーあ。最近、私と駆け引きしてくれる人がいなくてつまんなーい」

残念とばかりに両手を広げ、十和子は天を仰ぐ。そして、突然声のトーンを落とし

「えっとね。話してくれるなら聞くよ？ でも、話したくないんだっいたら聞かない」

真希へ向き直った十和子が、その金の瞳の中に真希の黒の瞳を映し込んだ。そこに、興味本位で探る好奇の色はない。ただ純粹に、相手を心配する気持ちだけが映されていた。

「……いや、ごめん。自分でもまだ、ね」

十和子の気持ちを楽しそうに思いつつ、真希はそう口にした。本気で心配してくれる友達を、こんな変なことに巻き込むのは気が引けた。

「そう……。分かった。でも、話したくなったらいつでも言っ
てね」

声の調子を元に戻し、十和子は真希から視線を外した。その姿は、
少しだけ残念そうな雰囲気を感じていた。

だから、というわけでもないのだろうが、真希はくるりと振り向
いて自分の席へ帰ろうとする十和子の背中に、

「あのさ、変なこと聞くけど、妖怪って本当にいると思う？」

そんな疑問を投げかけた。

十和子の動きがピタリと止まり、ゆっくりと、真希の方へ振り返
って来る。

「本当に変なことだねー。どこかで本物でも見たの？」

「……ううん。やっぱり今の質問無し」

「そう？　じゃ、また後でねー」

再びくるりと踵を返し、十和子は自分の席に戻って行く。真希は
その背中を、無言で見送った。

第一章 その4

鴉天狗の小太郎が真希の家を訪れてから五日目の朝。真希は美春からある事実を告げられた。

「今日、この前いらした小太郎さんと、小太郎さんのお父様がお見えになるから、午前の授業が終わったらすぐに帰って来てね。早退はもう学校に伝えてあるから安心して」

ついに来たか、と真希は思った。遅かれ早かれ、いずれもう一度相對することになるとは思っていた。それを望む望まないに関わりなく。

その日、学校での授業にはまったく身が入らず、あれよあれよと時間だけが過ぎ、いつの間にか真希は学校を出て家に帰って来ていた。

玄関を開け、見慣れない靴がないことを確認すると、思わずほうと息を吐き出してしまふ。

「お、帰ってきたか、真希」

玄関先に一人の男が姿を見せる。烏丸昇治からすまじょうじ。真希の父親だ。そこそ有名な企業に勤めるサラリーマンで、容姿は至って平均的である。最近出始めたお腹を気にしている他は、これといって特徴もない。せいぜいが無駄に輝く眼鏡くらいだろうか。

「先方は二時くらいになるそうだから、今のうちに着替えて身支度を整えておきなさい」

真希の気持ちを中心に理解していないかのごとく、むしろどことな

くウキウキしながら玄関を去る昇治。真希は軽く殴りたい衝動を感じる。

「もっ……」

ぶちぶちと愚痴をこぼしつつ、真希は自分の部屋で着替えを済ませ、景気付けにと台所へ向かい、冷蔵庫から取り出した炭酸水を一気飲みする。

「ぶはー」

「真希ちゃん。親父臭いって言われるわよ？」

その行動を見ていた美春がたしなめるが、真希はぶいっと明後日の方を向く。

「いいじゃん。これくらいやらないと、やってられない気分なの」

その言葉もまた親父臭さの漂うものだったが、美春はしょうがないなといった溜息を吐くだけだった。

そここうしているうちに時は進み、問題の二時を少し回った頃、呼び鈴が鳴った。

「御免仕る」

「お邪魔するけえ」

前回と同じ格好　いわゆる山伏装束というらしい　の小太郎と、おそらく特注のスーツを着込んだ、熊の如き体躯のヒゲもじやの男がやってきた。奇怪にしか見えない、異様な二人組みだった。

「まあまあよくいらっしやいました。どうぞこちらへ」

美春が応対して、二人は居間で待つ真希と昇治の前にやってきた。そのまま父娘の対面にどつかと腰をかける。美春は客人に冷えた麦茶を出すと、昇治と挟むようにして真希の隣に座った。

「初対面の方もいらつしやるので、簡単に自己紹介をさせていただきます。こつ。私は鴉天狗の剛鍊こうれんと申します」

ヒゲもじやの男 剛鍊は、全員が席に着くなりまずそう切り出
した。

「そしてこれが、倅の小太郎です」
「改めてよろしゅう」

小太郎もまた剛鍊に習つて頭を下げる。相手が名乗つたのだから、こちらも名乗るべきだと考えたのだらう。昇治が口を開く。

「ご丁寧にありがとうございます。私は烏丸昇治と言います。そして、二つ隣が妻の美春、隣が娘の真希です」

美春が静かに礼をするのを見て、真希もしぶしぶそれに習つた。

「それでは、自己紹介も済みましたところで、まず先日の倅の無礼をお詫び致します」

再び剛鍊が頭を下げた。かなり礼儀正しい人物のようである。本人の弁を借りれば、鴉天狗ということだが。

「いえいえ、とんでもない。大したおもてなしも出来ませんで、こちらこそ失礼いたしました」

それに対し、美春も深々と頭を下げる。

「いやいやそんなことは……」

「いえいえとてもとても……」

互いに頭を下げ続ける剛錬と美春。どこかのコントのような光景で真希としては少し笑えるが、これではまったく話が進まない。

「美春さん、剛錬さん、話が進まないのその辺にしておきましょう」

いい加減なところで昇治が二人を止める。

「おお、そうでした。今日の用事はそちらが主ではありませんでしたな」

気恥ずかしさを紛らわせるためだろうか。剛錬は軽く咳払いをし、そして息を吸い込んだ。

真希はごくりと唾を飲む。

「では、単刀直入に申しませう。あなた方の娘さん、真希さんを倅の嫁に頂くとのお話ですが、ご了承いただけますか？」

「ええ、是非に」

「ちよつと待てええっ……」

即答で見事に八モる昇治と美春の言葉に続き、真希の叫びが居間に木霊した。

それはおそらく、彼女の十六年の人生で一番大きな声であろうと思われるほど、魂のこもった絶叫だった。

「あら？ 何かおかしかったかしら？」

心外だとも言わんばかりの表情を作る美春に対し、真希はわずかとはいえ、殺意すら覚えた。

「おかしいものにも、本人の意思無視して話し進めてんじゃないわよ！」

怒りに任せて強くテーブルを叩くが、その場にいる誰も微動だにしない。ただ、剛錬だけが真希の言葉に眉をひそめた。

「む？ 昇治殿、何か互いの情報に齟齬があるようだが……？」

問われた昇治は苦笑いを浮かべ、頬をぼりぼりとかく。

「いやーははは、うっかりしてましてね。娘に例の話をしたのは、小太郎君が来た日が初めてだったんですよ。その時私はちょうど出張でして、今日まで詳しく説明する時間が取れなかったものですよ」

「なんですと？」

剛錬の顔が、豆鉄砲を食らった鳩のようになる。見事な三つの丸だった。

「親父、じゃから言っただじやろうが。本人にはまだ話がいつとらんとな」

それまで傍観を決め込んでいた小太郎が、最初から投げやりな感じで口を挟む。

「しかしお前、この前面通しは済ませたのだから?」

「あー、まあ、の……」

口ごもる小太郎。その際、ちらりと真希の方を見たのは、初めてあった時のことを思い出しているのだろうか。そう考え、真希自身もあの日のことを思い出し、赤面する羽目になった。

「あなた、まさかあのことを思い出してるんじゃないでしょうね?」

顔に熱を持ちながら小太郎に詰め寄る。正確にはテーブル越しに顔を近づけたのだが、

「な、あ、阿呆。あんな小さな胸なんぞもつ覚えておらんわ!」

顔を近づけられたことに驚いたのか、若干後ろに引きながら、小太郎がそう答える。

見事なまでに語るに落ちていた。

「ち、ち、小さいですってえ!?!」

一人の女として少なからず、いや大いに気にしていることを言葉、真希は瞬間的に沸騰した。さっと右手を伸ばし、小太郎の胸倉を掴んで引き寄せる。反動で相手の頭がわずかにのけぞり、がら空きになった首を左手で掴み取ると、

「ぐおっ」

「このむつつりスケベ!」

そのままぎゅうぎゅうと左手に力を込める。

当然、それに抵抗して小太郎の手が引き剥がしにかかってきた。

「だ・れ・が・助・平・じゃ！」

「あ・ん・た・よ・あ・ん・た！」

しばらくの間その攻防は続いたが、あまりの事態に一時呆然としていたそれぞれの親が協力することで、何とか真希と小太郎を引き離すことに成功した。

「はあ……はあ……」

「ぜい……ぜい……」

互いに荒い息を吐く。無茶な体勢で力を入れていたため、真希は身体の節々に痛みを感じていた。だが、ペチャパイ発言の怒りは収まらない。せめてギロリと小太郎を睨んでおくが、お面に隠れて表情に変化があるのかどうかは分からない。

「本当にすみませんね剛錬さん。小太郎君、大丈夫かしら？」

美春が心配そうに小太郎を見る。

「奥方殿、ご心配なさらずに。この程度でどうこうなるほど、倅は貧弱ではありません」

「ほうじゃ、儂らは頑丈に出来とるけえ。この程度では、ゴホツ、大したことはないならん」

その割にはなかなかきつそうに見えなくも無いが、とりあえずは父子の返答を得て、美春が若干ほっとした顔を作った。しかしすくなく難しい顔をして、

「真希ちゃん。小太郎さんに謝りなさい」

「……嫌」

真希はぶいっと美春と反対の方へ顔を向ける。

「真希、とにかく暴力はよくないよ。それは謝っておかないと」

向いた先の昇治も、真希に謝罪を促す。回りは敵だらけだった。それでも彼女は、頑として謝ろうとはしない。

「だって、あたしはそいつに裸見られた上に、そのことを馬鹿にされたのよ？ 怒って当然じゃない」
「何ですと？」

真希の言葉に驚いたのは剛連だ。即座に隣に座る小太郎に顔を向け、本人が明後日の方を向いて目を会わせようとしなのを確認すると、次の瞬間にはその頭を拳で打ち抜いていた。

すごい、としか言いようがない音がした。椅子に座っていた小太郎の身体は、おそらくは床に倒れているのだらう。真希の位置からではテーブルが邪魔して見えない。

剛錬がやや前かがみになり、そして身を起こした。すつと伸ばされた右手には小太郎の頭が鷲掴みにされ、その身体は冗談みたいにぶらぶらと揺れている。

剛錬はそのまま呆然としている烏丸親子に向き直ると、いきなり自分と小太郎の頭をテーブルに激しく打ちつけた。幸いにもテーブルは壊れなかったが、真希はまたも驚かされることになった。

「真、真に申し訳ありません！ 倅が、そのような狼藉を働いていようとは……」

がばつと身を起こし、再びテーブルに顔面ダイブ。もちろん小太郎も同じように叩きつけられている。異様過ぎる光景だった。加えて、さつきから小太郎が微動だにしていなかったのだが、ちゃんと生きているのだろうか。と真希は不安になる。

「格なる上は、この阿呆の命を持って償
」
「ストロップ！」

三度目の顔面ダイブを、真希は叫ぶことによって阻止した。物騒な言葉が出たのも要因の一つだが、さすがに小太郎の状態が心配になったのである。いけ好かない奴で最低だとしても、こうもズタボロにされる姿を見て喜べるほど、彼女は冷血な人間ではなかった。

「えっと、あの、剛錬さんでいいんですよね？　ともかくちょっと落ち着いてください。その、確かに裸見られましたけど、馬鹿にされましたけど、だからってそこまでしなくてもいいんじゃないかな
」って……」

さつきと言っていることが若干矛盾している気がしたが、真希の感じた怒りなど、とつくの昔に冷めていた。冷めざるをえなかった、と言った方が適切かもしれない。

「そ、それでは、倅の狼藉は不問に、許して頂けると？」

驚きと期待が混じったような表情と声だった。先ほどまでのビリビリと発せられていた怒りの感情は、ほとんど霧散してしまっている。

「いや、ああ、えつとですね。あたしの方もやりすぎましたし、その、喧嘩両成敗？　みたいな形でどうかかと」

出来うる限りの笑顔をもって出した真希の提案を受け、その内容を吟味するように剛錬が低くうなる。その目がちらりと真希の両親に向けられたが、昇治は頷き、美春はニコニコとした笑顔でそれに応えた。

ややあつて、大きな溜息を一つ吐き出すと、剛錬は右手に掴む小太郎をぱつと離れた。糸の切れた人形のように崩れ落ちる小太郎。しかし、すぐに緩慢な動作で立ち上がってきた。頑丈だと言うのは本当らしい。

「小太郎。話は聞いていたな？」

「……ああ、なんとかの」

テーブルに手をつきながらも何とか体制を整えると、小太郎は真つ直ぐに真希を見た。

「……あー、故意ではなかった、ゆうことは分かって欲しい。じゃが、悪戯にお主を傷付けたのは確かじゃ。その、すまんかった」

「ううん。もついいよ。あなたのお父さんがあたしの代わりに全部やってくれたしね。だから、あたしがあなたにしたことだけは謝る。ごめんなさい」

ぼろぼろの状態で、それでもしつかりと謝ってきた小太郎に対し、真希もまた素直に謝ることが出来た。そんな自分に、わずかな驚きを感じる。

「はい。それじゃあとりあえずこの一件はおしまいにしましょう。」

大分別の話になりましたけど、今なら真希ちゃんもちゃんと聞いてくれると思いますし、仕切り直しにしませんか？」

両手を合わせ、美春が提案する。その場にいる誰にも、異論はなかった。

「それじゃあ、ちょっとお茶を入れて一息つきましょうか」

そそくさと美春が台所へ立つ。その手伝いとばかりに、昇治も席を立った。

残されるのはおかしな父子と娘が一人。真希は対面の二人を交互に眺め、自分にとっての戦いは今がまさにスタートラインなのだと確信した。

第一章 その5

春から夏にかけて、日没の時間はどんどん遅くなる。腕時計が示す午後四時程度では、外はまだまだ明るい。

あちらこちらに、元気にはしゃぎ回る小さな子どもたちの姿がある。そんな子どもたちが一瞬静まり、すぐにまた騒ぎ出した。

「あー、あの人変な格好してるー！」

「すげー。なんかお面もかぶってるぞ。今日どっかでお祭りやってたっけ？」

「祭りはわかんねーけど、あれってシバケンジャーの悪役の面じゃね？」

そんな声を聞き流しながら、真希はなるべく早足で歩いていった。理由は、自分の後ろを山伏の格好に黒いお面のままで付いてくる小太郎から、少しでも離れているためである。

「のう。さつきから騒がしいんじやが、何かあったのか？」

「あんたの格好が奇抜すぎんよ……」

真希は溜息を吐かずにはいられない。

家族間会議が一段落したところで、真希と小太郎は夕食の買出しを命じられた。一人でいいと小太郎の同行を断ったのだが、結局押し切られてしまった。

何が何でも婚約者として認めさせるといふ事だろうか。

「のう。その『すーぱー』とやらはまだ遠いのか？」

若干怪しい発音で、小太郎が尋ねてくる。早くも飽き始めた様子だった。

「まだまだよ。本当なら自転車とかで行く距離なんだから」

買出しの際の条件の一つ。徒歩で行くことだった。これにはさすがに猛反論したが、どうやら小太郎は自転車に乗れないしかなかった。ある意味当然なのかもしれない。

「おお。あの不安定な乗り物か。歩くよりは速いらしいが、まあ飛ぶのには敵わんじやろう」

「そりゃ、飛んだら早いでしょうね。道を歩く必要もないし、ずっと近道出来るものね」

小太郎の言葉を聞いて、真希はちらりと空を見上げた。翼を広げた一羽の鳥が、頭上を通り過ぎていく。

翼、か。

空を飛んでみたい。そう考えたことのある人は多いと思う。かく言う彼女も、空飛ぶ鳥に憧れた経験はある。

鴉天狗だという小太郎は、何度も、それこそ飽きるほど飛んだことがあるのだろうか。

それにしても……

真希は先の家族間会議の内容を思い出す。そもそも、何故突然妖怪が彼女の目の前に現れたのか。

剛錬の話では、昨今の人間の活動により、野生動物だけではなく、妖怪もまた住処を奪われ続けているのだという。自分たちを守るた

め、徹底抗戦で人類と敵対するには、妖怪は数が少なくなり過ぎた、とも。

数が急激に減少した原因は、もちろん人間側の行いによるところが大きい。元々妖怪同士では子どもを作り難い傾向があったらしい。

ところが、古い話にもあるような人間と妖怪の婚姻では、不思議と子どもに恵まれることが多い。子孫不足に悩む彼らはそこに目を付けた。

現存する妖怪たちが寿命を終えれば絶えるかもしれない血を繋ぐため、生き残っている妖怪同士での協議の結果、人間に混ざることと共存を目指そうという意見が生まれた。

子孫を残し合える関係である以上、それに賭けてみようという話になっただけらしい。

その足掛かりとして選ばれたのが、真希のように妖怪と人間の間生まれた半妖を祖先に持つ家系の者なのだそう。一度妖怪を受け入れた家系であれば、今一度受け入れるに易いのではないかと、という理由はどうかと思っただけだ。

妖怪……か。

ちらりと背後を盗み見る。現代の街並みにあって、目を引かざるをえない奇妙な格好。そしてあのお面。

これも説明を受けたが、端的に言ってしまうと、妖怪としての姿を隠して人間に化けるために必要な装置といったものだった。

その割にはあいつの父親、思いつき叩きつけてたわね。

小太郎のように若い妖怪は、人間の暦で十八になるまで、自分で力を制御して化けることが出来ないらしい。かといって、十八になるまで人間と隔絶した生活をしていては、共存という目的を達成するに当たって問題が大きい。

そのため、出来るだけ早いうちから人間社会に交じるために講じる措置だという。

けど、姿はいいとして、あのお面じゃ本末転倒じゃないかしら。

それこそ、小太郎に好奇の目を向けている小さな子供たちの中に、こんなお面をした子どもが混じっていたらどうなるだろうか。

子どもは残酷で正直だ。異物の排除に迷いが無い可能性は高い。それでももし人間不信にでもなれば、やはり妖怪の計画は頓挫することになるのではないだろうか。

「……ねえ」

少し気になって、真希は歩きながら軽く背後を向いた。

「ん？ なんじゃ？」

「そのお面だけどさ。何か他に代用品は無かったの？」

ピタリと、小太郎の足が止まった。やや反応が遅れて、真希も足を止める。

「何よ。急に立ち止まって」

完全に身体ごと向き直り、真希は両手を腰に当てて小太郎を見る。

「あー……」

当の小太郎は、言葉を濁しながら人差し指でお面をぼりぼりとかいた。昇治の癖に似ていたので、真希は思わず噴出しそうになった。だが、

「やっぱり、気になるか？」

小太郎の言葉を聞いて、はっとなる。彼の声に、わずかなためらいと怯えのような感情が混じっていたからだ。

触れるべきではない話題だったと少し後悔するが、今ここで話を切っても微妙な空気しか残らない。それは嫌だった。

「そりゃ、ね。あんたを馬鹿にするつもりは無いけど、やっぱりお面を被ったままってというのは、周りから変な勘繰りをされても文句は言えないもの」

「いや、周りは周りとしてじゃ。ただ、の。お主が気になるかどうかを、聞いておきたいんじゃない」

真希が考えていたものとは、ずいぶん違った返答が帰ってきた。

あたしが気になるかどうか？

どういう意味なのだろうか。卑下するわけではないが、小太郎にとって周囲の人間も真希も、それほど大差のある存在ではないはずだ。婚約云々の話はあれど、それにしなっただけで昨日今日と言ってもいい話ではない。

「えっと、それってどういうこと？」

少々訝しみながらも、真希はとりあえず問い返した。

「どうもこうもない。お主の考えを聞きたいと言っておるんじゃない」

淡々と話す小太郎。お面に隠れて表情は見えない。さっきのように、声に感情が混じっている様子もない。いたって普通に話しているようにしか見えなかった。

触れるべき話題ではないと思ったのは早計だったのかもしれない。

「そうね。やっぱり気になるかな。今まで、あんたみたいな奴に会った事ってないし。それに、表情が見え難いのよ。何となく分かる時もあるけど、ね」

率直な意見を述べたつもりだった。だが、真希の言葉を聞いた小太郎は、見るからに悩み始めていた。

両腕を組み、うつむき加減になる。ぶつぶつと何か言っているようだったが、真希の位置では聞こえない。

「えっと、あたし何かへんなこと言った？」

ちょっと心配になり、声をかける。すると、小太郎はびっくりしたとしか表現しようのない動きをし、じっと見上げる真希を見つめた。

何となく分かる。今の小太郎のお面の下では、先の剛錬と同じような三つの丸が作られているはずだ。

「……あ、ああ。すまんすまん。いや、お主の考えはよう分かった。さて、このまま立ち話しをしとつても遅くなるだけじゃけえ。ともかく先に進もうかのう」

なにやら早口にまくし立てると、小太郎はスタスタと歩き始め、真希を追い抜いて先に行ってしまった。

そんな小太郎の様子に少々面喰った真希だが、クスリと小さく笑うと、

「ちょっと待ちなさいよ。あんた行き先知らないでしょうが」

再びピタリと止まった背中を追いつき、先導する様に少し前を歩き始める。ちょっとだけ、楽しい気分だった。

「のっ」

「何？」

真希の後ろから声がかかる。でも、とりあえずは振り返らずに答える。

「少し話をして構わんか？」

「いいわよ。どうせ先はまだまだ長いし、退屈しの手にはなりそうなもの」

「おう」

背後で、小太郎が深呼吸をするのが聞こえる。ずいぶんと気合を入れていようだが、どんな話をするつもりなのだろうか。

「儂はな、本当は、人間と婚姻するつもりなどなかったんじゃ」

いきなりすごい告白が出た。その言葉の重さを感じ、真希は下手に相槌を打たずに、無言で先を促す。

「儂は、妖怪じゃ。鴉天狗じゃ。その事を誇りに思っておった」

妖怪であることに誇りを持つ。それはどういう感覚なのだろうか。真希に置き換えれば、人間であることに誇りを持つということになるが、そんなことはついぞ思ったことがない。

「だというのに、親父たち年長の妖怪は、人間と共存する道を探ると言つて、儂ら若い妖怪と人間とを結びつかせようとしておる」

若干、怒りが混じっているように感じる言葉だった。だから、ついで、真希は尋ねてしまった。

「人間は、嫌い？」

「……ああ、大嫌いじゃ」

自分のことを名指しされたわけではないが、その言葉はずしりと真希の心にのしかかり、ドロリとした何かが深くに沈殿する。

「森も、山も、川や湖も、海でさえもぐちゃぐちゃにしよる。儂は生まれてまだ十六年じゃけえ、古い話は他からの伝聞でしかないが。それでも、方々を見て回れば嫌でも目に付く」

環境破壊という言葉は、真希も知っている。幼い頃によく遊びに行つた祖父の家。ちよくちよく不法投棄が問題視されてはいたが、それでもなお雄大な自然が溢れていた。

でも、今は開発によって切り開かれ、見る影もない。

「じゃが、それでも一度。ただの一度だけじゃが、人間を信じてもいいかもしれんと思える出来事に出くわした。それがあつたからこそ、儂は今まで断り続けていたものを、今回に限り受ける気になつた。無論、無条件にはないがのう」

今回に限り……？

真希はその言葉に疑問を抱いたが、ここで聞くことは何故だか躊躇われたので口にはせず、すぐに印象が薄れて忘れてしまった。

いつの間にか二人はまた立ち止まり、小太郎は静かに遠い空を見上げていた。

「ほんで、儂がこの話を受ける代わりに出した条件が、この面じゃ
見せ付けるように、小太郎が視線を真希に向けてきた。彼女は、
それを真っ向から受け止める。」

「これと同じ力を持つものは、本来形状を選ばん。腕輪でもええ。
首飾りでも耳飾りでも問題ない。実際に人間に混じり、生活をしな
ければならん妖怪たちが、自由に決めて構わんものじゃ」

それはつまり、小太郎が望んでお面という形状を選んだというこ
とになる。

「妖怪の姿を捨て、人の姿を借りて生きる。それはええじゃろう。
その方が物事は円滑に進むしう」

こつこつと、小太郎はお面の表面を指で叩く。

「だが、儂はこう考えた。そもそも、妖怪という存在を連れ合いと
して選べるだけの素質があるのなら、たとえその姿がどのようであ
ろうとも受け入れられるはずじゃ、とな」

小太郎がそこで言葉を切る。

思わず、真希はゴクリと唾を飲み込んでいた。少し渴いて張り付いていた喉が痛みを訴える。

「のう。さっきの席では特に見せる機会もなかったけえ。じゃから、先に教えとく。この面はな」

真希はなんとなく、いや、確信を持って、続く小太郎の言葉を予想した。彼は間違いなく、こういった意味の言葉を口にするのだから。

「儂の本当の姿の顔に似せて作っておる」
自分の本当の姿がモデルだ、と。

予想していたからだろうか。真希は特に驚くこともなかった。だが、それは小太郎にしてみれば意外なことだったらしく、さっきまでの真面目な雰囲気はどこかに忘れてしまったように、

「ん？ なんじゃ、あまり驚いておらんようじゃのう」

少しつまらなさそうな、それでいてどこか嬉しそうな声で言った。

「まあ、言おうとしてる事が何となく読めたからね」

本当は確信に近かったが、そんな事は言わない。緊張を解くため、ちよつと余裕ぶって真希は肩をすくめて見せた。

「……少し引つ張りすぎたかのう。むしろ、先に結論から言っておれば、お主の驚く顔が見れたかもしれんか？」

「さーて、どうだろうね。っと、また立ち止まっちゃってるじゃな

い。この時期は日が落ち始めると早いんだから、急がないと」

腕時計を確認すると、時刻はすでに五時に近い。このままの調子では、買い物時間も考えると帰り着く頃には七時を回ってしまう。

「ほら、さっさと行くよ」

手で小太郎に促し、真希はまた歩を進め始めた。

「あ」

その直後に、真希は声を上げる。

「うん？ どうかしたか？」

「さっきの話、それなりに興味深かったよ。あんた、結構面白い奴よね」

ただの褒め言葉のつもりだった。しかし、その言葉を聞いた小太郎がまた立ち止まってしまう。

「ちょっと。今度は何？」

急ごうと言ったばかりだというのに、真希はそれに反する小太郎に少しの苛立ちを覚える。

だが、ただ立っているだけに思えた小太郎の体が小刻みに震えている事に気がつく、慌てて近くによって彼の顔を見上げる。お面に隠れて表情は見えないのだが、反射的な行動だった。

「え？ え？ ちょっと本当にどうしたの？」

そこでふと、真希は家で剛錬が行った折檻の事を思い出す。常人が喰らっていけば入院必至の攻撃だったはずだ。さすがの妖怪であっても、実は結構堪えていたのではないだろうか。

「あんたまさかさつき怪我と
「かつかつかつ！」

心配する真希の言葉は、突然発せられた小太郎の大声に掻き消された。その大声は、どう考えても笑い声にしか聞こえなかった。

「……………え？」

あまりの出来事にキョトンとせざるを得ない真希。それを見て、さらに小太郎が笑う。腹を抱え、しまいには膝を突き、地面をバシバシ叩き始めた。

「ほ、ほ、本当に、お主こそ面白い奴じゃ。儂は今までこんな人間に出会ったことがない」

なおも笑い続ける姿を見るに、どうやら怪我云々の心配は必要が無さそうだった。それはよかったのだが、真希としては何か心配した分損した気になる。

けれど、その笑う姿が余りにも普通だったので、彼女もなんだかおかしくなって、一緒に笑ってしまった。こんなに笑うのは、久しぶりだった。

ひとしきり笑いあって、二人はまた歩き始めた。立ち位置は変わらなかったが、さつきよりずっと、距離は近くなった。

「すごい時間食っちゃったから、急がないと」

「そうじゃな」

腕時計の示す時間は五時十二分。真希はちよつと笑い過ぎたと思つた。

「あー、いつそ本当に飛んで行けばいいわね」

若干薄暗さをのぞかせはじめた空を見て、真希は何の気無しにポツリと言つ。

「おう、一緒に飛んでくか？」

「そうね。そう出来たらいいわね……って、え？」

真希は思わず振り返っていた。やはりお面に隠れて見えないが、その雰囲気から小太郎がニヤニヤ笑っているような感じは受け取れた。

「飛んでくかつて、あんたはともかくあたしは飛べないわよ？」

何かの間違いでこうして妖怪と話してはいるが、烏丸真希は一応ごく普通の人間である。妖怪が先祖にしようが、それが事実として変わることは無い。

「いや、多分飛べるじゃろ。まあ、ちよい試してみよか」

しかし、小太郎はそんなことには構わず、懐をまさぐって何やらお札のような物を二枚取り出した。その一枚を真希に差し出してくる。

「ほれ。とりあえずこれを持つとけ。結界を張るための札じゃ」

無造作に渡され、真希はとっさに受け取ってしまう。古びた紙に、なにやら不思議な模様や記号が描かれている物だった。それ以外は何の変哲もない、ただのお札にしか見えない。

「つと、次は……」

小太郎の身体から力が抜けたような感じを見て取る。その、次の瞬間、真希の耳は空気を打つ音を捉えていた。

「え？」

真希の視線は、目の前の光景に釘付けになる。何故なら小太郎の背中に、漆黒の翼が生えていたからだ。

古来より、人は綺麗な黒色を鴉の濡れ羽色と称するが、真希はその艶やかな美しさに目を奪われる。

「……つて、ちょっとちょっとここ町中」

数秒見とれてしまつてから、真希は慌てて周囲を警戒した。いつの間にか周りの視線に慣れてしまつて忘れかけていたが、人目が無くなつていたわけではないのだ。

「大丈夫じゃ。この札で、周りのもんは儂らを認識できん」

焦る真希に対して、小太郎はひらひらとお札を示す。確か、結界とか何とか言つてたが、つまりはこれのおかげで自分たちは見えなくなつていくということだろうか。

真希は思わずまじまじとお札を眺め、こんな物も実在したのかと感心してしまう。

「さて、これからが本番じゃ。お主、ちよい後ろ向いとけ」

ちよいちよいと指で回れ右をしると合図が来る。

「……変な事するつもりじゃないでしょうね？」

なんとなく素直に言葉に従うのは癪だったので、真希は軽口を叩く。しかし、返ってきたのは、

「阿呆。真面目な話じゃ」

言葉は乱暴なままだが、ひどく静かな、ともすれば優しい声だった。

むむ。

肩透かしをくらった真希は、何とも手持ちぶたさになってしまい、結局言われるままに小太郎に背を向けた。

「ちつとちくつとするかも知れんが、一瞬じゃ。安心せい」

「え？　ちくつて　痛っ！」

言われたように、背中にちくりとした痛みが走る。

「何するのよ！」

慌てて振り返ると、小太郎は何事も無かったかのように平然とそこにいた。真希は思わず詰め寄ろうとするが、

「そろそろじゃ」

「え？ なに言っ……て？」

直後、真希は背中に違和感を覚えた。若干身体が重くなったような気持ちになり、次いで肩甲骨けんこうこつ付近に何かの感触を感じる。

「あれ？ なんかなんか変な感じ……が……？」

恐る恐る肩越しに背後をのぞき見る。すると視界に、何故か小太郎と同じような黒い翼が飛び込んで来た。

「え？ え？ ええええっ!?!？」

驚愕する真希の背中に、一對の翼が生えていた。肩甲骨に力を入れると、バサバサと動く。感じた事のない感触に背筋がぞわわとなるが、不快かと思えばそうではない。

「ほう、これは見事なもんじゃ。思った以上じゃな」

一人頷く小太郎。だが、真希は混乱したままだ。

「ちよ、何で感心してんのよ！ 何これどういう事!?!？」

真希は小太郎の胸倉をつかんで説明を求める。かなり必死だった。だから、詰め寄られているのに嫌がるどころかやや嬉しそうな小太郎のおかしさには気が付かない。

「自分に妖怪の血が混ざつとることは聞いたじゃろ？ 妖怪の血が入った人間に、混ざつとると同属の妖怪が力を分ければ、活性化させる事が出来るんじゃ」

胸倉をつかまれたまま、小太郎が説明する。

「妖怪の血を活性化？ それって、あたしも妖怪になるって事？」

小太郎が首を横に振る。

「いや、妖怪にはなれん。じゃが、妖怪の持つとる力を一時的に使えるようにはなる。今は僕の羽根を一枚刺してやったんじゃが、まあ、それだけでこつも見事な翼が生えるとは思わんかったがのう」
「えつとつまり、あんたがあたしに力をくれたから、あたしの背中に翼が生えたと？」

今度は縦に振った。

「ほうじゃ。飲み込みが早うて助かる」

小太郎から手を離し、真希はふらつと一步後ろに下がる。もう何でもありだった。事實は小説より奇なりとはよく言ったものだと思う。

「ほんじゃ、早速飛んでみようかの」

「え？ ちょ、ま、あたし飛び方なんて知らないわよ！？」

「最初は僕が手助けするけえ。とにかく慣れじゃ。ほれ」

わたわたと取り乱す真希の手を小太郎がつかむ。この間は気が付かなかつたが、ちよつとごつごつした、男の人の手だった。何故か、真希は少しだけ身体が熱くなった気がした。

「よし、行こか」

「まつ、心の準備が　　きゃあっ！」

浮遊感。次いで風を身に受け、真希は思わず目を閉じてしまった。暗闇の中で感じるものは、なんとなくジェットコースターに乗っているようなものに似ていた。

しばらくの後、風を切る感覚はそのままに、水に浮いているような浮遊感だけが残る。

「ほれ、しっかり目え開いて、自分でも風をつかまえんかい！」
「う……」

恐る恐る目を開く。目の前に、遠くの街並みが見えた。ただし、見えるものはほとんどが建物の屋根だ。

「うわわわっ！」

驚いて真希は身をよじる。だが、不思議と水に浮いているような浮遊感は崩れなかった。高い位置にいるのに、ひどく安心出来た。

「大丈夫か！？」
「え？」

きよろきよろと周りを見る。すぐ隣を、小太郎が飛んでいた。その手は、しっかりと真希の手を掴んだままだ。

「ええか！　背中にあるもんを、自分の腕と同じような感覚で意識するんじゃない！　大きく開いて、風を感じるんじゃない！」

風の流れる音に負けないようにだろう。小太郎は声を張り上げてそう言った。

「安心せえ！ 絶対に落としたりせん！ 儂の命に代えても、お主は守る！」

真希の心臓が、跳ね上がった。本人の意味するところは違うのだろうが、こんな状態でそんな事を言われて、反応せずにはいられなかった。

これは釣り橋効果釣り橋効果釣り橋効果……

「ん？ どうした！？ 降りた方がええか！？」

真希の様子の変化に気付いたのか、小太郎が少し心配そうに言う。

「う、ううん！ 大丈夫！」

動揺を悟られないように、真希は威勢よく返事をしておく。

「お……。ほうか！ じゃあ、儂が言った様にやってみい！」

多少首をかしげながらも、とりあえずは気にしない事にしたようだ。小太郎は再び真希に行動を促して来る。

「……よし」

助言された通りに、背中の翼を意識する。自分の両手を広げるように、ゆっくりと翼を動かしていく。

「お？ ええぞ！ その調子じゃ！」

一度感覚を覚えてしまえば、思ったより簡単だった。真希は自慢げに翼を広げたり閉じたりという行為を繰り返す。

「かっかっかっ！ いきなりそれだけ動かせる奴は初めてじゃ！ お主実は妖怪なんじゃなかるうな！ 儂が翼出した時も驚いとらんかったしのう！」

快活に笑う小太郎。それは本当に楽しそうだった。

「ふふん。これくらいどうってことないわ！」

だから真希もそれに調子を合わせる。彼女もまた、今この時を楽しんでいた。

「かっかっかっ！ 次は広げたまんまで風を感じてみい！ 身体で感じるもんと翼で感じるもんを分けて感じるんじゃ！」

最後の部分は少し意味不明だったが、真希は翼を広げ、風を意識した時にその言葉を理解する。

翼の角度によって、翼のみが感じる風と、身体全体で感じる風の流れがあることに気付いた。同時に、一定の角度で風を受けることで強い浮遊感を感じ、別の角度に変えることで右へ左へ身体を流せることも理解する。

「よしよし。大分慣れたようじゃの！ ほじゃ、ちょいっと手を離すけえ、自分で飛んでみい！」

「え？」

突然、つかまれていた手から感触が消えた。真希の心に、少しの不安がよぎる。だが、

「飛べる！」

自分を鼓舞するように言葉を発し、真希はバランスを崩す事なく、そのまま空を飛び続けた。

「おうおう！ 見事じゃあ！」

小太郎の嬉しそうな声が聞こえる。そんな彼を見て、真希は思う。容姿はともかく、妖怪の内面は人間とそう変わりはないのではないかと。

「ねえ！」

「なんじゃ！？」

「あんたの名前、もう一回教えてよ！」

多分、また三つの丸を作ったなと真希は思った。相変わらずお面で見えないが、絶対にそうだという確信があった。

「……おう！ 小太郎じゃ！ 鴉天狗の小太郎じゃ！」

「小太郎！ あたしは真希！ 烏丸真希！」

名乗りあう二人。この時が、二人にとって本当の出会いだった。

「おう！ 真希！ せっかくじゃ！ ちっと競争と行こか！ あの一本杉までどちらが先につけるか勝負じゃ！」

小太郎が指した方向に、明らかに周囲の建造物に勝る一本の木が小さく見える。距離は二キロメートルくらいだろうか。周囲は開けた広場になっているようだ。

それを確認して、真希は自分の変化に気が付く。翼が生えただけでなく、視力もずいぶんと上がっているらしい。

「いいわよ！ 負けた方が勝った方の言うことを何でも聞くっていうのはどう!?」

「ええじゃろう！ 罰があったほうが盛り上がるけえ！」

「えっちいのは禁止だからね！ それじゃ始め！」

真希はさつと宣言し、自分のタイミングで先にスタートを切る。

「あ！ こら待たんかい！」

後ろから小太郎の声が聞こえるが、真希は無視した。これくらいのハンデは、相手との年季の差からいって必要だろう。

だが、すぐに背後に大きな風の流れるを感じる。やはり意地があるのか。ついさつき飛ぶことを覚えた彼女に負ける気はないらしい。

「だけど！」

真希にしても、負けるつもりはさらさらなかった。さらに速く飛ぶべく、翼の角度を調節しながら飛び続けた。

誰の目にも映る薄闇に包まれ始めた空を、誰の目にも映らない二対の黒翼が翔けて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419y/>

婚約者は鴉天狗

2011年11月2日02時05分発行